

台湾・ベトナム経済視察団報告書

令和5年9月17日(土)～9月23日(日)



令和6年3月



HIROSHIMA KEIZAI DOYUKAI

広島経済同友会

国際委員会

◆ 目 次 ◆

・はじめに	団長 武田 龍雄	1
・台湾・ベトナム経済視察団名簿		2
・台湾・ベトナム経済視察団日程		3

《視 察》

【台湾】

臺北港貨櫃碼頭（台北港コンテナターミナル）	前田 耕一	4
	梅本 良徳	6
T S M Cミュージアム	長井 眸	8
	中川 玲子	

【ベトナム】

イグアスコーヒーベトナム社	加田 智之	10
	中谷 圭吾	11
トヨタヒロシマ・タンカンHT社	吉田 豊	13
	細田 宗嗣	15
HAL VIETNAM	勝矢 博	17
	大和 珠子	19
F P Tソフトウェア社	高原 哲也	21
	桑原 弘樹	

《表敬訪問》

【台湾】

日本台湾交流協会	加藤 雅規	24
	杉之原祥二	26

《所 感》

【台湾】

国立故宮博物院を訪れて	野口 隆志	27
国父祈念館	森藤 雅彦	29
台湾の食	奥原 祥司	30
台湾雑感	古川 浩延	31
台湾の視察を振り返って	荒谷 悦嗣	32

【ベトナム】

広島大学ベトナムセンター交流会	山根以久子	34
ベンタイン市場	長沢 伸彦	35
広島銀行ハノイ駐在員事務所	井上 広隆	36
ベトナムの食	田村 満則	38
ベトナム雑感	田村 興造	40
ベトナムの視察を振り返って	堂本 高義	42

・おわりに	副団長 山本慶一郎	44
-------------	-----------------	----

～ はじめに～

広島経済同友会
台湾・ベトナム経済視察団
団 長 武田 龍雄
(広島信用金庫 会長)

当会では、令和5年9月17日(日)から23日(土)の7日間にわたり、台湾・ベトナムに経済視察団を派遣いたしました。

コロナ禍の休止期間を経て、4年振りの再開となる本視察については、欧米への視察費高騰も踏まえて、約3年振りに広島からの直行便がいち早く再開された台湾と、今年我が国との外交関係樹立50周年を迎え、当地からも多くの企業が進出しているベトナムの2か国を選定しました。

新時代を迎えた両国の実情に触れ、その経済のダイナミズムを感じるにより、今年度「広島を“いかそう”」をスローガンに、新時代に適応した持続的な発展を目指す当会の活動に活かしていくことを目的としております。

最初の訪問地台湾では、台北港貨櫃碼頭(台北港コンテナターミナル)を訪問し、世界的な海運のハブ構築に向けて取り組まれているコンテナヤードの運営状況やIT化されたオペレーションシステム等を視察しました。台湾国内港では3番手の取扱量という同港ですが、そのスケールは十分に大きく、同国の発展の一端を垣間見た気が致しました。加えて、熊本への進出で一躍注目を集めた世界的半導体メーカーであるTSMC(台湾積体回路製造)のミュージアムを見学し、圧倒的な技術開発力で世界を席卷する台湾半導体産業の成り立ちや今後の展開などについて理解を深めました。また、国交のない台湾で実質的な大使館として機能する公益財団法人日本台湾交流協会を表敬訪問し、現地の政治情勢や今後の両国の関係性等について、大変興味深いご教示をいただきました。

続いて訪問したベトナムでは、同国を有望な自動車販売マーケットとして進出された広島トヨタ自動車株式会社様の現地法人であるトヨタヒロシマ・タンカンHT社、アジアをマーケットとする自動車部品製造業として進出された広島アルミニウム工業様の現地法人であるHAL VIETNAM社という、現地で20年以上にわたり事業展開されているサービス業と製造業の2社を訪問し、自動車の製造と販売という2つの視点からみた同国やアジアのマーケットの現状や課題を共有できました。またブラジルに次ぐ第二のコーヒー大国として著名な同国でインスタントコーヒー原料の製造を行うイグアスココーヒーベトナム社と同国最大手のIT企業FPTソフトウェア社への訪問や、広島銀行現地事務所からの情勢報告等により、発展著しいベトナム経済のダイナミズムを体感しました。加えて、広島大学ベトナムセンターとの交流会では、今後増加が見込まれている同国からの来日外国人労働者の視点も加えて、今後両国が更に交流を深め、共に発展していくための方策等について考えさせられました。

それぞれの視察先や交流会などの詳しい状況は、各団員の報告をご覧ください。こととして、团长としては、団員の皆様のご協力により、無事に視察日程を終えることができ、安堵いたしております。また、今回の視察の成果が、今後の同友会活動に反映されることを期待しております。

結びにあたりまして、ご参加いただいた団員各位、視察先の手配などお世話をいただいた国際委員会の皆様及び関係者の方々に対し心より感謝申し上げます。

台湾・ベトナム経済視察団 名簿

(団 長)

武 田 龍 雄 広島信用金庫 会長

(副団長)

山 本 慶一朗 (株)中国新聞社 社主兼常務取締役

(団 員)

田 村 興 造 広島ガス(株) 代表取締役会長
荒 谷 悦 嗣 (株)荒谷建設コンサルタント 代表取締役
井 上 広 隆 日本銀行広島支店 支店長
梅 本 良 徳 伊藤忠商事(株) 中四国支社 支社長
奥 原 祥 司 コトブキ技研工業(株) 代表取締役社長
勝 矢 博 (株)カツヤ 代表取締役会長
加 藤 雅 規 (株)加藤組 取締役副社長
杉之原 祥 二 (株)マナック・ケミカル・パートナーズ 取締役会長兼社長
高 原 哲 也 丸紅(株)中国支社 支社長
田 村 満 則 ヒロコンフーズ(株) 代表取締役社長
堂 本 高 義 堂本食品(株) 代表取締役社長
長 井 眸 (株)アルツトハンス 副会長
中 川 玲 子 社会保険労務士法人 S a L a c 会長
長 沢 伸 彦 (株)たびまちゲート広島 取締役会長
野 口 隆 志 (株)ノサックス 専務取締役
古 川 浩 延 ゲイソー・ロジスティクス(株) 代表取締役社長
細 田 宗 嗣 細田林業(株) 取締役
前 田 耕 一 中国電力(株) 常務執行役員
森 藤 雅 彦 住友商事(株)中国支社 支社長
山 根 以久子 (株)サンポール 代表取締役会長
吉 田 豊 白井汽船(株) 代表取締役社長
桑 原 弘 樹 三井物産(株)中国支社 業務室 次長
中 谷 圭 吾 広島信用金庫 担当副部長
大 和 珠 子 広島ガス(株) 秘書部
加 田 智 之 (株)中国新聞社 報道センター経済担当
谷 口 康 雄 広島経済同友会 事務局長

◆ 日 程 表 ◆

日数	月日・曜日	都市名	発着時刻	交通機関	予 定	食事
1	9月17日 (日)	広島空港 発 台北空港 着 空港 発 台北	9:30 11:10 12:45 昼 午後 夕刻 夜	CI113 専用バス	チャイナエアラインで台北へ (2h40m ▲1h) 現地係員と合流後、市内へ 昼食：故宮晶華 (飲茶) 【市内視察】 故宮博物院など ホテルチェックイン 夕食：吉品海鮮酒楼 (海鮮料理) 【市内視察】 士林夜市 台北 グランドハイアット台北 (泊)	機 昼 夕
2	9月18日 (月)	台北 新北市 新竹市 台北	朝 9:00～ 昼 13:15～ 19:00	専用バス	朝食：ホテル 新北市へ (1h00m) 【視察】 台北港貨櫃碼頭 ～10:30 新竹市へ (1h20m) 昼食：晶宴會館御豐館 (米粉料理) 【視察】 新竹サイエンスパーク ～15:45 視察終了後、台北へ (1h20m) 夕食：日本台湾交流協会との懇親会 台北 グランドハイアット台北 (泊)	朝 昼 夕
3	9月19日 (火)	台北 桃園 台北空港 発 ホーチミン空港 着 空港 発 ホーチミン	午前 昼 14:10 16:45 18:15 夜	CI783 専用バス	朝食：ホテル 【市内視察】 國父記念館ほか 昼食：點水樓南焿店 (小籠包) チャイナエアラインでホーチミンへ (3h35m ▲1h) 現地係員と合流後、ホテルへ 夕食：宿泊ホテル内 (インターナショナルビュッフェ) 食後、ホテルチェックイン ホーチミン ホテルニッコーサイゴン (泊)	朝 昼 夕
4	9月20日 (水)	ホーチミン フーミー工業団地 ホーチミン	朝 9:30～ 昼 14:00～ 19:00	専用バス	朝食：ホテル フーミーへ (1h30m) 【視察】 イグアスコヒーベトナム社 ～11:00 ホーチミンへ (1h30m) 昼食：ヴィンパールホテルレストラン (ブンチャー) 【視察】 トヨタヒロシマ・タンカンHT社 ～15:30 夕食：広島大学ベトナムセンターとの懇親会 コムニエウレストラン (ベトナム料理) ホーチミン ホテルニッコーサイゴン (泊)	朝 昼 夕
5	9月21日 (木)	ホーチミン ホーチミン空港 発 ハノイ空港 着 空港 発 ハノイ	午前 昼 15:00 17:15 18:15 19:00	専用バス VN248 専用バス	朝食：ホテル 【市内視察】 ベンタイン市場 他 昼食：オーシャンパレス (飲茶) ベトナム航空機でハノイへ (2h15m) 現地係員と合流後、市内へ 夕食：広島銀行駐在員による現地事情ブリーフィング LYクラブ (ベトナム料理) 食後、ホテルチェックイン ハノイ メリアホテルハノイ (泊)	朝 昼 夕
6	9月22日 (金)	ハノイ タンロン工業団地 ホアラックパーク	朝 9:30～ 昼 14:00～ 19:00	専用バス	朝食：ホテル タンロン工業団地へ (1h00m) 【視察】 広島アルミニウム工業 ～11:00 昼食：工業団地内・ほたる食堂 (和定食) 【視察】 FPTソフトウェア社 ～15:30 夕食：ナムフォンレストラン (ベトナム料理) ハノイ メリアホテルハノイ (泊)	朝 昼 夕
7	9月23日 (土)	ハノイ ハノイ空港 発 台北空港 着 台北空港 発 広島空港 着	朝 11:35 15:20 17:20 20:50	専用バス CI792 CI112	朝食：ホテル 空港へ チャイナエアラインで台北へ (2h45m +1h) チャイナエアラインで広島へ (2h30m +1h)	朝 機 機

*5：日本港湾協会 「コンテナ貨物量上位 100 港一覧表（2021 年）」より。

なお、1 位は上海（中国）、2 位シンガポール。日本では東京が 46 位、横浜 72 位、神戸 73 位、大阪 82 位。

*6：日本港湾協会 情報誌「港湾」2017 年 6 月号 「高雄・台北港における自由貿易港区 (FTZ) の活用」より。

2. 視察結果と感想

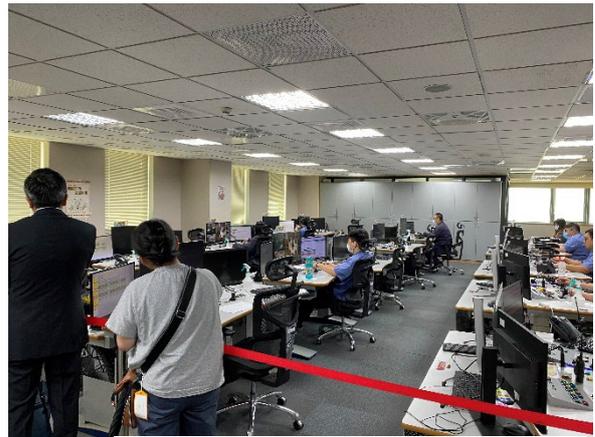
実際に訪問して実物を見ながらターミナル運用の説明を聞いた中で最も印象に残ったのは、顧客サービスと他港との競争を念頭においた、コンテナの受け入れ・払い出しの利便性・効率性の確保であった。荷上・荷積用の 13 基のガントリークレーンと、コンテナヤードを運用する 30 基の門型クレーン、正月の 1 日を除く 365 日 24 時間のバース運用、7 時（土・日は 8 時）～23 時のコンテナヤード作業と、コンテナヤードの自動化がこれを支えている。

ヤードに搬入されたコンテナには RFID タグが取り付けられるとともに、コンピュータ制御（安全確保等の観点でオペレータも介在）により、空いたスペース・クレーンを利用して最短時間で荷卸しが完了する。また搬出は 3 日前からの予約を受けることで、搬出予定のコンテナが効率的に持ち出せるよう、夜間にコンテナの積み替え・並べ替えを行っている。こうした工夫で、例えば、荷物を積んできたトレーラは入構～荷卸～荷積～出場が平均 20 分で終了することのこと。

台北港は、世界最大級のコンテナ船（約 24 万トン、20 フィート長の標準コンテナを 2 万 4 千個積載可能）も入港可能であることと合わせて、台湾北部の経済・物流を支える大きな役割を果たしているが、こうしたインフラ整備が BOT 方式による民間企業による投資・建設・運用で進められていることを見て、経済界の一員として「投資」の重要性を改めて感じた。



台北港コンテナターミナル全景



クレーンオペレーションルーム



チェン会長から武田団長へ記念品贈呈



プレゼンテーション聴講の様子

～臺北港貨櫃碼頭（台北港コンテナターミナル） 2～

梅本 良徳

伊藤忠商事(株) 中四国支社長

広島経済同友会の海外視察に初めて参加させて頂きました。まずは武田団長をはじめ同友会事務局の皆様、参加者の皆様や現地でご対応を戴いた全ての皆様へ感謝申し上げます。

台湾到着の 2 日目に台北港にある台北港貨櫃碼頭の視察に向かった。バスで台北市内のホテルを出発して約 1 時間。台北港は台湾北西部を流れる淡水河の河口に位置し、2004 年に国際商港として発展してきた港である。共に石油製品、自動車、コンテナを扱っている。港の背後の新北市には新竹工業区や新竹サイエンスパークといった台湾北部の工業地域があり、高速道路も接続され、首都・台北市や桃園空港などへのアクセスは良好である。

1. 港湾の外観印象

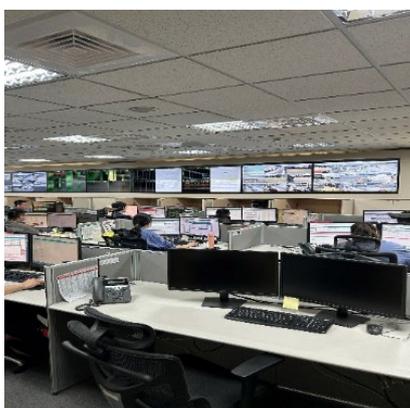
- ・ 111 ヘクタールもの広大な敷地。港湾全体がコの字型に構成され、内側各所での積み下ろしが行われる。特に、倉庫やコンテナヤードは巨大。
- ・ 高速道路を降りてすぐの立地。台北市／新北市等の大都市へのアクセスが良く、道も広く、大型トレーラーが頻繁に行き来しており、陸上輸送のスムーズさを感じた。
- ・ 意外なほど、港湾（戸外）で働く人を見かけなかった。



2. 台湾港コンテナ埠頭（TPCT）の概要

- ・ グローバルな海運会社 3 社による合弁会社。出資会社を含め多数の顧客を有する。
- ・ 港湾当局の監督の下、港湾建設／運営を BOT 方式で請け負っている。港湾整備投資金額は約 540 億円。
- ・ 台北エリアの国際コンテナのハブの位置づけ。船舶管理、積み下ろし、倉庫オペレーションが主な業務。年間 240 万トン以上の処理能力を持つ。

3. TPCT の特徴



- ・ 最大の特徴は、コンテナ・オペレーションの効率化・自動化。ハードとしては、荷揚げ・荷積み用の大型クレーンとコンテナヤードでコンテナを運搬する大型の門型クレーンが配備されている。ソフトとしては、トラックがコンテナヤードに入ってから出る迄の一連の作業をコンピューター制御でコントロールする。ワイヤレスセンサーでコンテナの位置を識別して、効率的な作業を行う。

- ・ コンテナ・オペレーションは中央管理室において、数十名のオペレーターでリモートコントロールするシステム。

各所にオペレーション用の監視カメラを配置し、荷物のデータを照合しながら遠隔操作を行う。

- ・トラックの入庫／出庫管理やコンテナのタグ管理の電子化、荷降ろし・荷積みコンピューター制御により、主要オペレーションの自動化／作業時間の短縮化／少人数化を実現している。

《感想》

大都市と大都市を支える巨大ターミナルの両方の現場を実際に見ることにより、大都市の経済と物流を支える巨大ターミナルの重要性を認識する事が出来た。また、巨大市場を潤す為の物流を運営する為には、大量処理・自動化・効率化等の近代化の為の港湾整備の必要性を強く感じた。その為の投資組成スキームや運営ノウハウは学ぶべき点が多いにあった。特に、これだけ大規模且つ大量のボリュームを処理する為にはオペレーションの近代化・効率化がカギを握ることを改めて認識した。

台湾同様に、資源が無く、島国の日本にとって、海運貿易の重要性は言うまでも無いことであるが、経済発展・国の成長の為には、貿易を更に自由に・効率的に行う制度や仕組みの導入が不可欠であることを再認識する大変有意義な機会であった。

最後になりますが、今回の訪問をご手配戴いた丸紅／高原支社長様並びに現地丸紅駐在員の皆様には深く感謝申し上げます。



～TSMCミュージアム～

長井 眸
(株)アルツトハンス 副会長
中川 玲子
社労士法人 S a L a c 会長

・ 2023年9月18日(月)午後、いよいよ「TSMCミュージアム」訪問へ。

バスは一路、新竹市へ向かう。TSMC(台湾積体電路製造)の工場見学ができる訳もないのでミュージアムでがまんするしかないのがちょっと残念。「台積創新館」という名前のこの建物は少々個性的な(人間の頭のような)形状となっている。TSMC本社に付設され、2016年12月に開館した近未来型の博物館で、TSMC創業と発展の歴史を学ぶと同時に半導体についての学びを深めることができる。

「台積創新館」



・第一エリアは半導体エリアである。半導体が組み込まれた基板が目に入ってくる。



かつて日本の半導体産業は50%を超える世界1位のシェアを持っていたが、現在は10%程度に凋落している事に苛立ちながら視察に臨んだ。

1980年代、半導体はあまりに日本のシェアが高かったことで日米貿易摩擦が生じ、日米半導体協定による貿易規制が強まった。また日本はメモリ半導体の一種であるDRAMが主力商品だったが、さらに安くDRAMを製造できる韓国、特にサムスンの台頭を許すことになり、日本製半導体は凋落していった。このような日米貿易摩擦と汎用品の価格競争が激化した頃に1987年TSMCは起業したことになる。

同時期ビジネスモデルの変化でアメリカを中心に、半導体企業は設計を担当する企業と、製造を担当する企業とで水平分離する潮流が生まれてきていた。日本は電機メーカー各社とも、社内で設計から製造までを行う従来のビジネスモデルを続けたため、新しい潮流への対応が遅れてしまった。逆にTSMCはこの製造を担当する企業分野に進出した。そして現在、世界最先端技術といわれる3ナノレベルの半導体を生産する世界最大規模の半導体企業となった。

ガイドのエリスさんの案内では、今では小さな小さな半導体が、我々の生活の中の至るところで使われており、また不断の「創新(イノベーション)」によって現代人の生活を大きく改変し、我々の生活をさらに豊かなものにし、しかも科学技術の進歩は無限に持続発展している、という説明。ごもつとも。



・第二エリアでは、TSMCがどのようにしてこのIC事業に取り組んできたか、いかに世界のICイノベーションの原動力となって台湾の経済発展に貢献してきたか、さらに、TSMCは真に信頼できるリーダーとして、毎年顧客と協力して数千種類のウエハーを創り出して世界の科学技術を不断に前進させ続けている、との説明。

・ 第三エリアでは、TSMC(台湾セミコンダクター・マニファクチャリング)の創設者モリス・チャン(張忠謀)氏の紹介。

1931 年生まれのモリス・チャン氏は現在 92 歳。世界初で世界最大のこの半導体製造メーカーを育てた彼が、この IC 事業を起業したのは 1987 年。56 歳の時というから驚く。普通の人であれば、そろそろ引退を考える頃からこのような台湾の IC 産業と技術の発展に貢献する一歩を踏み出そうとは!!

映像を見る限りでは 70 代にしか見えないモリス・チャン氏が、この 36 年間台湾の IC 産業の発展のために「不断の前進」を続けて来られたということは、つぎのことばに表れている。

「成功したければ、不断の創新(イノベート)をしなさい」

「厳しい挑戦の後ろには美しい未来がある」



私がこのミュージアムの展示で一番心をうごかされたのは、この第三の展示エリア。偉大なモリス・チャン氏の人生をお手本に、私も残る人生を「不断の前進」とまではいかななくても「停滞をしない」生き方をしていきたいと決意した 1 日であった。

館内見学後、希望者は VR 体験ができる体験コーナーへ。そこでは各自ゴーグルを装着して「未来の会社員のお父さん」または「未来のお嬢さん」の 1 日を体験した。

TSMC ミュージアムを後にして、我々は新竹サイエンスパークの全貌を俯瞰できる施設である「新竹サイエンスパーク管理棟」に向かった。ここ新竹では、中央政府・地方政府の権利委譲が進んでいることとハイテク管理により、スタートアップ企業もワンストップで起業が支援され、研究開発環境も整備されている等の説明があった。

このような研究環境の支えがあってこそ TSMC のような世界企業が成長発展できたのだと理解した。



◆【視 察】ベトナム

～イグアスコーヒーベトナム社1～

加田 智之

㈱中国新聞社 報道センター経済担当

ホーチミン市中心部のホテルからバスで約1時間半。バリアブントウ省の日系企業が多く進出する工業団地に、今回の視察先であるインスタントコーヒー製造販売のイグアスベトナム社があった。丸紅（東京）が100%出資し、2022年秋に稼働したばかりの真新しい施設だ。



コーヒーの生産量世界第1位のブラジルに拠点を持つイグアス社が、同2位のベトナムに進出したのは、東南アジア諸国連合（ASEAN）で伸びる需要を取り込むためだった。嗜好品であるコーヒーは、一定の経済成長を経た国や地域で需要が伸びる傾向がある。ASEAN域内だと関税がかからない利点を生かし、将来的な販路拡大を狙っているという。

生産工場内を見学して驚いたのは、従業員がほとんどいないことだ。メインの工場棟ではコーヒー豆の焙煎から抽出、濃縮して乾燥させるまでの工程が行われるが、作業員は工場内に2～3人しかいない。離れたところにあるコントロールルームで工程を管理し、工場内にいるのはメンテナンス担当などだけだ。商品数が違うため単純比較はできないが、ブラジルの工場は倍以上の人数が必要だという。「衛生、安全、コスト面を追求するためDXを進めるのは当然」と言われればそれまでだが、想像以上に人手が少ない現場だった。

ブラジルより少ない作業員で済むと言っても、人材確保の点では日本と違う苦労があるようだ。ベトナムは離職率が高く、それは月給で地域の最低賃金より数十ドル多く支払っているイグアス社も例外ではない。「仕事内容が想像と違う」という理由で1カ月も経たずに辞めたケースもあるという。「1カ月やそこらで仕事の何が分かるの」と考えてしまう日本の感覚でベトナムに乗り込んで、対策が後手後手となってビジネスが続かないだろう。

最後に、視察で感じたベトナムという国の熱気についても触れておきたい。同社は工場を作る際、国による検査が実施されるまで数カ月の時間を要した。体制が整っていないという途上国ならではの問題もあるが、ベトナムに進出しようとする企業が多く、順番待ちになっていることも



大きな要因だという。私が「それだけベトナムという国が熱いってことですか」と聞くと、同社の現地駐在員は「そうです」と目を輝かせた。「日本の好景気」というのをほとんど知らない世代だけに、ベトナムの熱気にすっかり当てられてしまった視察だった。

～イグアスコffeeベトナム社2～ coffee大国ベトナム 躍進の気配

中谷 圭吾

広島信用金庫 経営企画部 担当副部長

早朝7時半、ホーチミン市内中心部のホテルを出発した我々のバスは、ラッシュアワーで、文字通り道路から溢れんばかりのバイクの波とクラクションの喧騒をかわしながら進んでいく。ハラハラしながら行方を見守り、走り続けること1時間半余り、郊外に出てバイクの数も減り、バスもようやく快走を始めた矢先、バリア・ブントウ省フーミー3特別工業団地にあるインスタントcoffee原料の製造会社「イグアスコffeeベトナム社」の工場に到着した。



2022年10月から11月にかけて完全稼働したという同工場は、まだ真新しく清潔で、南国の太陽を浴びて白く輝いている。

会議室にご案内をいただき、ほどなくして、カラフルなcoffeeカップが運ばれてくると、室内は一気に香しいかおりに包まれた。

coffeeをいただきながら、同社の設立経緯や製造工程、環境配慮への取組みとしてのバイオマスボイラー活用、熱凝縮で発生する蒸気を動力として再利用する仕組み等の最新鋭の設備についてレクチャーを受けた。工場の稼働準備期にコロナ禍が重なり大変なご苦労をされたこと、ベトナムの法令は解釈が難しいケースもあり許認可手続き等でも苦慮されたこと、本場のノウハウ移管のためブラジルのIGCからも人材が入られていることなど、現場の生の声での解説もいただいた後に、早速工場見学へと向かった。

生産ラインは想像以上に巨大で、また稼働音も大きい。場内は暑いものの、作業員の姿はほとんど見受けられず、省人化がすすんだ印象を受けた。そして、焙煎の過程で発生する香ばしいかおりを身体中に浴びて、とても幸せな心地になった。

工場内の見学を終えて場外に出ると、今度はバイオマスボイラーのプラントを見学させていただいた。製造設備で使用する蒸気を生成するプラントということで、こちらも想像を上回る巨大な設備であった。



今後、建物の屋上にソーラーパネルを設置する計画があり、実現すれば、年間電力量の2割程度を賄うことができるとともに、屋上の直射日光が遮られることで空調コストの軽減も期待できるということであった。

世界のインスタントcoffee需要は今後も堅調に推移すると予測されており、その中でもASEAN・中国地域は20億を超える人口を擁し、世界平均を上回る需要増加の実績も報告されている。

またベトナムは、ブラジルに次ぐ生産量世界第2位を誇るコーヒー大国であり、特にインスタントコーヒーの主原料として用いられるロブスタ種では世界最大の生産国という。

ベトナムの主要なコーヒー豆の生産地は南中部地域であるが、同工場はそこから近く、またベトナム南部で唯一の国際深水港であるカイメップ・チーバイ港が2 km圏内にあつて輸出に非常に便利であることから、最適な生産拠点として大いなる発展が期待されると言えよう。

現状は業者向けのB2Bの製品展開のみとお伺いしたが、いつの日か、見学させていただいた光景と「バイクの波」に思いを馳せながら、「IGCベトナム」のロゴの入ったインスタントコーヒーをいただきたいと楽しみに思っている。

大変貴重な体験をありがとうございました。



～トヨタヒロシマ・タンカンHT社1～

吉田 豊

白井汽船(株) 代表取締役社長

前回 2013 年、広島経済同友会国際委員会はトヨタヒロシマ・タンカン HT 社を訪問した。私は、10 年ぶりにサイゴンの拠点を訪れ、今回が 2 回目の訪問である。当時の場所は区画整理の対象になっており隣に移動されていた。タンカンはサイゴンの一等地である。私は、トヨタヒロシマの北部ベトナムの拠点のヴィンフック省の店舗を進出当時（2012 年）から訪問しており、今日まで成長を観てきたので比較して観ることにした。

結論として両拠点とも、広島の販売システムを戦略として持ち込まれているので同じであった。因みに、自動車販売価格では、現地組み立てで多くの会社の通勤車で購入されている INNOVA2.0v の価格は 616 万円、タイからの完成車として輸入される日系企業幹部の通勤車として人気の CAMRY2.5HV は 916 万円、日本から完成品輸入の ALPHRD LUXUARY (2,651 万円)、LAND CRUISER 300 (2,655 万円) と高級品関税がかかるが良く売れる。品質面では世界のトヨタ自動車のブランド。トヨタは燃費が良く故障が少ないとの評価。コストについてだが、輸入車は高級品関税がかかるにも関わらず、中古車でも価格低下しないために財産価値がありよく売れる。サービス面は日本のきめ細かなサービスへの評価が高く、ここがベトナム人の日本志向とマッチし成功のポイントとなっていた。



今回は、広島トヨタ自動車(株)代表取締役社長藤井一裕氏が現地で出迎えて頂き、私たちの訪問を社員の皆様と熱烈歓迎頂いた。また、藤井氏自らが広島トヨタ自動車の三代目社長であり、日本の全国 5 番目のトヨタ自動車の販売ディーラーとして、新たな思いで 2001 年のご長男の誕生を機に、第二創業を決断された。当時、海外で有力市場として注目を集めていたベトナムのサイゴンは、社会主義国の暗さは全く感じなかった。そのころもサイゴンは既に活気を帯びていた。当時北部の首都のハノイは、電力事情も悪く、薄暗いイメージであった。私の初めてのベトナム訪問も同時期の 2000 年。私は、藤井社長がベトナムのサイゴンへの進出を決断されたのが理解出来る。藤井社長のベトナム進出の動機をご本人は、経済発展、料理の旨さ、魅力的な女性、日本人が嫌われていないと素直に話されていた。私も多いに納得した次第である。

コロナ前の 2019 年には新車の販売台数が年間で 3,691 台を達成。その後、コロナ禍で、2,603 台 (2020 年)、1,834 台 (2021 年)、2,359 台 (2022 年)、今年の年初から 8 月までの実績が 908 台。新車の販売の不調と見るか？電気自動車へ消費者意識の変化か？自動車業界も転換期に入った模様である。南部も北部の首都のハノイも一機に電気自動車用のチャージステーションの整備が加速している。都市ではヴィングループの電気自動車(タクシー含む)多く見かけるようになった。

トヨタヒロシマベトナムは自動車の整備も充実しており大使館の高級車も依頼が来ている。社内教育、福利厚生面もしっかりと行っており、朝のラジオ体操や、社員食堂、お昼寝ルームや社員旅行も充実していた。山本国際委員長の謝礼のご挨拶では、社員の目に力があり、死んだ社員がないと素晴らしい好評があった。夜は我々の会食にもご参加いただいた。進出から20年を経て、藤井社長から多くの騙された経験を聞き、私も同時期からベトナムに入り、北部で起業から操業しており、多いに共感を得た。



～トヨタヒロシマ・タンカンHT社2～

細田 宗嗣

細田林業(株) 取締役

今回トヨタヒロシマ・タンカンHT社を視察させていただいた。幸運にも藤井一裕代表取締役会長からも直接お話を伺うことが出来た。藤井会長のお話や視察全体を通じて多くのことを感じる事が出来たが、今回は3つに絞って書かせていただきたいと思います。

1. ベトナム人の気質

ベトナム人は義理堅く、清潔でプライドが高いということだったが、私が会社を訪問させていただいた際、一番感じたことは従業員であるベトナム人の礼儀正しさだった。挨拶はもちろんのこと、お辞儀や笑顔が素敵で一生懸命仕事に取り組んでいることが伝わってきた。一方、ベトナム人は給料をお互いに見せ合う文化があり、自分の給料に納得がいけないと不満が溜まり、離職に繋がるとのことだった。馴染みのない文化がある中、押し付けるのではなく、従業員が納得して働ける環境をつくってきたからこそ2004年設立以来継続して発展を続けている大きな理由の一つだと感じた。



2. 人材教育

トヨタヒロシマ・タンカンHT社では、スキルの向上とモチベーション向上に取り組んでいる。毎年社員全員での社員旅行を実施し、全社員での懇親会や、サッカー部などのクラブ活動を行い、チームワークの向上を積極的に図っている。明確な目標があれば献身的に努力する人が多いため、日本人トレーナーによるOJTや広島本社のエンジニアとの合同トレーニングなど積極的にスキルの向上を図っている。特に、技能コンテストは1000人規模で実施され、スキル向上に大きく役立っているとのことだった。昨今日本においてエンジニア不足が深刻となっているが、研修制度ではなく、社員として日本で働く人材も増やしていきたいという想いを感じた。そのために、ベトナム人と日本人従業員の待遇を同等とし、公平な職場環境を提供することはもちろんのこと、日本に行きたいと思うモチベーションをあげることが大事というお話は今後継続的に続くと思われる日本の人材不足に対する一つの希望であると感じた。

3. ベトナムNO.1に向けた取り組み

トヨタヒロシマ・タンカンHT社は、2023年現在、人口1億人を超え、全国民の平均年齢が約33歳であるベトナムの最大都市であるホーチミンで100%独立資本により2004年に設立された。独立資本での設立に際し、大変苦労されたと同った。正しくても販売ライセンスの許可が出ない状況において、解決に導いたのは人脈だった。ベトナムは日本と同じく和を大切に思い、信頼を重んずる国である。信頼関係を構築する上で、人脈が重要であるというお話は個々の人間関係にとどまらず、過去から現在において多くの日本人の先人たちが築いてきたベトナムと日本の信頼関係によるところも大きいのだろうと思い、改めて先人に対する

感謝の気持ちを感じた。ベトナムでの設立から約20年、ベトナムでNO.1を目指し、それを信じて取り組んできたトヨタヒロシマ・タンカンHT社の挑戦が今後もホーチミンの活気ある街並みと共に、ベトナムと日本の未来を明るく照らすことを祈念して今回の視察報告書を締めさせていただきたいと思う。最後に視察に際し、藤井会長をはじめ、西田孝氏、お世話になった多くの関係者の皆様に感謝申し上げます。



～HAL VIETNAM（広島アルミニウム工業）1～

勝矢 博

(株)カツヤ 代表取締役会長

このレポートでは HAL VIETNAM のベトナム進出時から今日まで 20 年間の人件費高騰とその対策について自動化や給与制度をどのようにしてきたかを書く。

《自動化》

ベトナム TLP 地区の最低賃金は創業当時の 2003 年に月額 4000 円程度から 20 年後の 2023 年には月額 29000 円と 7.25 倍に上昇している。ちなみに広島の最低賃金は 2003 年の時給 644 円から 2023 年 970 円と 20 年間で 1.5 倍にしかになっていない。ベトナムのこの猛烈な人件費高騰に対し以下 4 点の自動化対策を成功させている。

1. セキ折り作業の自動化

稼働音が大きく難聴になったり、暑さのため熱中症になったりする危険性のあるセキ折り作業の自動化を進めた。

2. 取り出し・スプレーロボット導入（少量塗布）

3. 仕上げマシニング導入

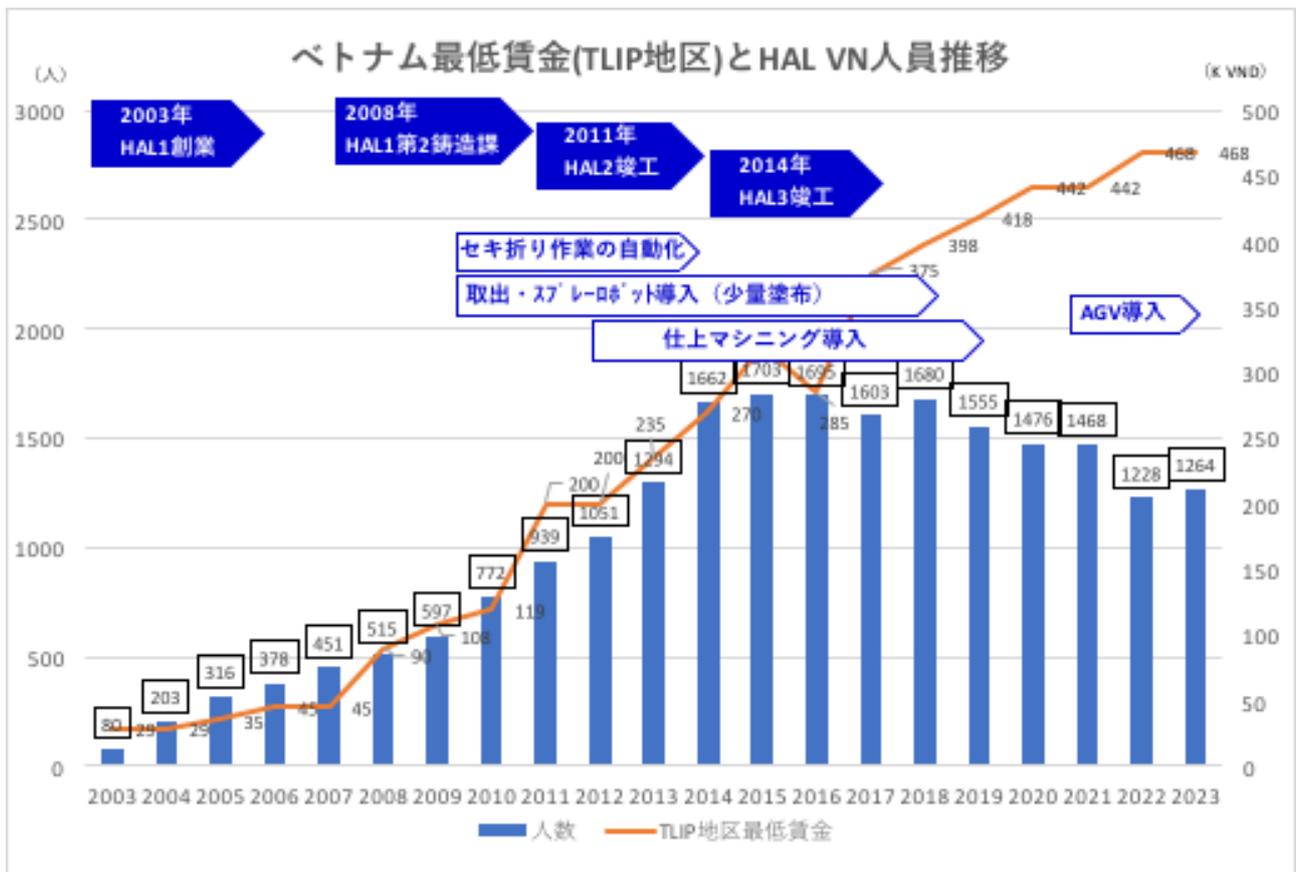
マシニングは機械加工とりわけ切削加工を意味する英語表現で、自動で切削工具の交換ができる機能を有しており、穴あけや平面削りなどの切削加工を 1 台で行うことが出来る機械で切削精度は 0.01mm 未満である。旋盤やフライス盤などの作業による加工の場合、ミスが起きたり、数値が狂ったりすることがどうしても発生してしまう。

4. AGV(無人搬送車)導入

《給与制度》

工場内の作業の種類ごとに試験に合格すると資格を与え、資格に対し手当をつける。工場内は資格により帽子やシャツの色を変え、何の資格を持った社員か一目で分かるようになっている。工場内で取得出来るすべての資格を持った人が最後に挑戦出来るのが、出荷前の製品チェックの資格だ。この最終チェックで製品の不具合を見落として出荷してしまうと後始末が大変なことになる。ベトナム人は給与額を見せ合うのが習慣になっているので、より公平な給与制度が求められるが当社では最低賃金に資格手当を上乗せしていく給与制度である。万一不良品を見落として出荷させてしまったら手当として最高額の検査員の手当は無くなるという緊張感のある制度である。

HAL VIETNAM は広島アルミニウム工業の子会社として 2002 年 12 月ハノイで設立され、マツダを初めとして大手自動車関連メーカーに対しエンジン及び変速機関連のアルミニウム鋳物製品・樹脂製品の製造および販売をしている。親会社広島アルミニウム工業は世界トップクラスのアルミニウムダイカストメーカーで創業は大正 10 年、2022 年時点での資本金は 3.5 億円、従業員数 2125 名、売上高 883 億円である。



《感想》

HAL VIETNAMの野村義宏取締役副社長にベトナムの仕事で最も楽しいことは何かを聞くと「改善ですね！」との答え。日常的に業務改善が進められているのが分かる。流通業界は製造業も小売業も物流業もすべて時流変化適応業である。同じ商品を同じお客様に同じ販売方法でビジネスしては早晚行き詰まる。1947年日本一のミササ釜のキャッチフレーズでアルミの羽釜を発売、1957年には機械部品・自動車部品の製造開始。太平洋戦争その他数々の社会変化や顧客ニーズの変化に適切に対応し続けた結果現在の当社の繁栄があるのだと思う。

今、自動車業界の急激な電動化により当然求められる商品群も変化している。目前の時流変化に遅れることなく果敢に挑戦して欲しい。

～HAL VIETNAM（広島アルミニウム工業）２～

大和 珠子
広島ガス(株) 秘書部

1. 視察概要

9月22日、宿泊先のホテルメリアハノイから専用バスで約1時間、日系企業率99%のハノイ市タンロン工業地区内にある、HAL VIETNAM（広島アルミニウム工業）を訪問した。今回の視察は、ゲンヒュウバイツ代表取締役社長と野村取締役副社長による、事務所棟講義室での企業概要説明から始まった。その後、二班に分かれ、工場内を歩いて案内していただき、 casting・金型製造・仕上げ工程を見学した。



2. HAL VIETNAM 概要

HAL VIETNAM は、2002年、広島アルミニウム工業の最初の海外拠点として設立された。なぜベトナムが最初の海外拠点となったかという



の社長のベトナム戦争時の出征地であったというご縁からだそうだ。資本金は2,430万USD。従業員数は、1,242名、内日本人駐在者は4名。日本人駐在者は、副社長他、品質保証部、生産技術部に所属し、専門的・指導的な役割を果たしており、人事も含めて工場のライン管理は、基本的にはベトナム人を中心としたものになっている。事業内容は、四輪車のアルミニウム製品製造ならびに販売、金型製作および販売。

3. 工場見学での気づき

- ・工場内は整理整頓されており、清潔感があつた。従業員に整理整頓を意識づけるため、濃緑色の床に白線をひいて作業場と通路を分けし、定置化を促している。
- ・仕上げ工程以外は、ほとんど機械化されており、一人の作業員が、3台のダイキャストマシンを担当している。 castingの機械化により、少数人でのオペレーションが可能となったという。仕上げ工程は、まだAIやカメラに頼りきれない部分があるため、機械化されていない。
- ・ castingの作業場は高温になるため、作業員一人につき一台、クーラーが設置されていた。

4. ベトナム流の運営

日本では行われていない、HAL VIETNAM独自の工夫を以下に記録する。

① ジョブローテーション

毎年、事務・現場問わず、ジョブローテーションを行う。従業員は、給与をキープしたまま異動し、半年ごとに開催される試験を受け、スキルが認められれば、追加の手当を受け取ることができるそうだ。この制度が、従業員の成長を促し、モチベーションアップにつながっている。

② 従業員のスキル管理方法

各従業員の役割やスキルが、工場内に設置されるスキル表や作業員の帽子・シャツの色分けにより、視覚化されている。定期的に行われる試験で、従業員のスキルは把握されているが、予告なしに「いじわるテスト」も行われるという。これは、仕上げ工程に抜き打ちで不良品を混ぜ、気づくことができるかどうかを確認するテストだ。不良品に気づけた作業員には、売店で利用できるクーポン券を配布する等、ご褒美が用意されている。

③ 日本語教育

従業員には、3年間、日本で実習する機会が設けられている。帰国した従業員は、ほとんど日本語を話せるようになっており、通訳として活躍する社員もいるそうだ。従業員の日本語は、工場内でも日本語で会話するよう意識したり、社内イベントの日本語スピーチコンテストに参加したりすることで、日常的に訓練されている。設計図面は、日本語が基本で、ベトナム語が併記されており、工場内に設置されている掲示板も、日本語表記のものが多くみられた。日本語資格を持つ従業員には、ネームプレートに「N」マークが記載される。日本語スキルに「N1」～「N5」のランクがあり、高いスキルを持つ従業員には、手当が支給される。管理職会議では、出席者の中に日本人が副社長1名であるにも関わらず、会議は日本語で行われるそうだ。

5. 感想

HAL VIETNAM は、日本の良いところを学んで浸透させ、さらにベトナム流の運営を多く取り入れている、と感じた。こうした運営の中で、最も苦勞したことは、やはり社員教育だったという。日本とベトナムでは、文化の違いが少なからずある。お互いの文化を尊重しながら、トイレの使い方や挨拶・掃除の習慣などから教育し、HAL VIETNAM 内独自の文化が創られてきたようだ。今では、20年近く勤める社員が見本となり、HAL VIETNAM の文化を継承しているという。日系企業でありながら、ベトナム人の社長を筆頭に、「ベトナム」の会社が着実に創りあげられていると感じた。



～FPTソフトウェア社～

高原 哲也

丸紅(株) 中国支社長

桑原 弘樹

三井物産(株)中国支社 業務室次長

1. 概要

1988年に13名にて起業したICT企業であり、オフショア開発に強みを持つ。

当初は安価なコストを武器にオフショアアウトソーシング先としての機能を担ってきたが、昨今は高レベルな技術開発力、並びにベトナムの特徴①年間57,000名のIT分野卒業生を輩出する豊富なICT人材プール、②通信/ITセクターの急成長、③安定した政治経済、を背景にして、日本はじめとした世界各国のオートモーティブ/製造/金融/物流/航空/医療/メディア/通信業界企業のパートナーとしての地位を確立している。

<パートナー企業一例>



2000年代後半以降大幅な拡大を続けており、2023年9月現在従業員数42,408名、売上高18.8億米ドル(2022年度)。売上高30%以上は日本市場からであり(同じく30%は米国市場)、日本法人「FPTジャパンホールディングス」は2005年開設以降規模が拡大し続けており、2018年には従業員数1,000名、2022年には2,000名を超え、2023年9月現在は2,700名となっている。広島事務所は2018年に開設。



2. 事業内容

コアビジネスは①テクノロジー(ソフトウェア開発、SIer)、②テレコミュニケーション(クラウド・データセンタープロバイダー、電子新聞)、③教育(ICT人材輩出を目的とした小学校～大学運営。生徒数100,000名超)の3点。関連して④小売事業(ベトナム内シェア45%薬局チェーンなど)、⑤流通事業にも進出。

3. 視察時の質疑応答及び所見

Q1：日本での売上比率が高いが、何故日本に注目したのか？また、日本進出時には低コストで勝負したと推定するが、その後変わったか？

A1：最初に進出した米国で苦戦したこともあり、日本に注目した。日本とベトナムは外交的に良好な関係を築いていることもあり、日本の売上比率を更に上げて 50% を目標としている。アウトソーシング事業で成功するにはコスト競争力と人材が重要と考えており、日本の IT 人材不足をカバーする役割を果たしていく。

Q2：ベトナム No. 1 の電子新聞を発行しているが、デジタルメディア分野では何を狙っているか？Chat GPT は経営に影響を及ぼしているか？

A2：電子新聞を立ち上げた 20 年前から変わらず、政府の意見を取り入れることなく、

独自目線での報道を目指している。Chat GPT はビジネスに大きな影響を与え得ると考えており、業務に取り入れることを検討している。将来的にはお客様向けのサービスにも取り入れることを考えている。

Q3：毎年多くの採用を行っているが、一定の人材レベルを確保する為に何か特別なことをやっているか？

A3：FPT 大学の卒業生のうち 25%程度が入社しており、人材レベルの確保に繋がっている。また、新入社員を 1 ヶ所に集めて研修を行う為のトレーニングセンターを建設する等、人材育成にも力を入れている。



高原所見：質疑応答の中で FPT 社から「日本は IT 人材不足であり自分たちがそれをカバーする役割を担うことで急成長を遂げることが出来た」というコメントがあった。

一方日本では、ICT ブームの際には情報系に人員が集まったが学生数の減少もあり、IT 人材不足は今後も続くものと思われる。FPT 社も規模が大きくなるに従い注目が集まり、優秀な従業員が引き抜かれていくことの対策が重要だと思うが、主たる対策の一つが学校経営＝優秀な人材供給の源を握ることであり、優秀な人材の安定供給を国や教育機関に任せきりにしていた日本企業との違いを見た思いがした。

桑原所見：ベトナムは軽工業や繊維業でコスト勝負の分野に強いとの認識があったが、今回 FPT 社を訪問し、同社のような IT 分野での大企業が出て来ていることを知り、自分が古いイメージを引きずっていることを思い知らされた。

どの国・分野でも人材の確保が重要な課題となっていると思うが、同社は自ら教育分野に進出し、小学校から大学院までの学校を運営し、優秀な人材の創出・確保を行っていることにも驚かされた。

質疑応答を通じて、人材育成を重要視していることが良く分かり、従業員を大切にする姿勢を含め、日本企業としても学ぶことが多いと感じた。



◆【表敬訪問】台湾

～日本台湾交流協会 1～

加藤 雅規
（株）加藤組
取締役副社長

9月18日に公益財団法人日本台湾交流協会台北事務所代表の泉 裕泰（ひろやす）大使公邸を訪問した。

日本台湾交流協会は1972年の日中国交正常化に伴い、日本と国府（台湾国民政府）との外交関係が終了したため、従来の民間レベルでの交流関係を維持するために設立された。

不勉強な私には理解できず、ウィキペディアのお世話になると中華民国は、中華人民共和国と国交を締結した国とは、即座に国交を断絶するという政策をとっていることが分かった。



今の最大の関心事は2024年の中華民国総統選挙と台湾海峡の平和であろう。現在の与党である民主進歩党は中国からの独立志向が強い政党とされ、一方の国民党は中国との関係改善を重視する立場である。現在総統選挙の立候補予定者は、与党1名と野党3名の4名であるが、野党が勝つためには連立が鍵である。中国の習近平国家主席は台湾統一への強い意欲を示しており、台湾海峡の緊張が高まっていることも事実である。台湾海峡は日本の船舶が6分に1隻通過する大変重要な海域であり、平和の維持が特に望まれる場所である。

我々一行は9月18日18時頃宿泊先のグランドハイアット台北を出発して故宮博物院方向へバスで向かった。ラッシュアワーでもあり渋滞を警戒して1時間前に出発したが、さほど大きな渋滞は無く予定時刻前には到着できた。

ここで台湾の交通事情に触れると、台湾は地下鉄や高速道路が発達しており、鉄道で台湾を



一周することもでき、新幹線が台北市から南部の高雄市を1時間半で結んでいる。走っている車は日本車が一番多いように見えた、台北市内は温暖な気候もありスクーターが非常に多い、しかし世界の渋滞と言われるジャカルタと違い、大きな道路ではスクーターの車線が設けられており、割り込みも少なく非常にスムーズに流れている。道路はゴミもなく交通マナーも良い。

特に路側にスクーターの駐車区画が有り、一台ずつきちんと並んでいるのは壮観であり感心した点である。広島市内にも路側に駐輪スペースを設けてマナー良く利用できたら便利になると思う。

大使公邸は故宮博物院から陽明山国家公園へ向かう坂の途中の閑静な別荘地のような場所に有り、バスが到着すると泉大使と服部副代表が出迎えてくださった。他の幹部職員の方とも名刺交換させていただいた。

交流協会台北事務所は代表・副代表のもと総務部・経済部・広報文化部がそれぞれ総務室などの室で組織され、30人ほどの職員が台湾在留邦人や邦人旅行者の便宜をはかる他、貿易、経済技術交流及び民間交流が支障なく安心して行えるよう日本から台湾に在留して活動しておられる。

私たちのテーブルには女性職員の総務室主任が付かれた。彼女は2人の子どもの母親でもあり、1人は台湾で一緒に暮らし、もう一人は日本で父親と近くに住む祖母が面倒を見ているそうだ。時々実家の祖母も遠くから応援に来てくれるらしい。子育てと外交員の両立である。

泉大使は広島のご出身で国泰寺高校の卒業生であり、広島で受けた平和教育が外交の道へ進むきっかけとなったこと、戦争は外交の失敗であるとの信念についてお話しされた。

また近隣諸国には、射程距離 12,000km のミサイルがすでに配備されるなど緊張が高まっており日本企業の危機管理にも配慮しておられる。

2011年の東日本大震災では台湾から多くの支援をいただき、現在も多くの旅行者が台湾から日本へ、また日本から台湾へ訪れているなど日本と台湾は強い絆で結ばれている。

これからも両国の素晴らしい関係が続くことを特に願いたい。



泉大使（前列左から3人目）を囲んで

～日本台湾交流協会 2～

杉之原 祥二

(株)マナック・ケミカル・パートナーズ

取締役会長兼社長

台湾 2 日目 9 月 18 日(火)敬老の日 19 時、公益財団法人「日本台湾交流協会」(代表理事は大橋光夫元昭和電工会長) 台北事務所長公邸を表敬訪問した。

1972 年の日中国交正常化に伴い日台交流協会が設立されて 51 年、日台交流協会台北事務所が、実質日本大使館の役割を担っている。また、現在 JETRO も台湾には事務所を置いておらず、台湾では日台交流協会が JETRO の役割を担っているとのこと。(司会の有田雄子貿易相談組長 JETRO より出向の談)

帰宅ラッシュのバイクの中を走ることホテルから 1 時間、バスは台北市北近郊の陽明山中腹にある所長公邸に着いた。

泉裕泰代表(大使)は 1957 年生まれ、広島のご出身で国泰寺中学～修道高校のご卒業との話。同席された滝川裕史渉外室長は広大附属高校のご卒業。

挨拶の後、数名ずつのテーブルに座り、現地状況の説明と質問の後、ビュッフェ形式の日本食を食べながら意見交換を行った。

対中関係が悪化する中でアジアだけでなく国際的に見た台湾の重要性、来年 1 月に行われる次期総統選挙の動向、国内情勢等の話があり、質問も活発に行なわれた。

また、半導体産業が大きくなったことで一部に計画電力が生じていること、貧富の差が広がったことが高級外車とバイクの増加に象徴されているとの話もテーブルの会話の中で聞いた。

8 月の麻生副総理の訪台にあったように、今、台湾に対して日本からの注目が集まっており、昨年秋から日本からの訪台者が増えたとのこと。

良いタイミングで現地で生の話を聞くことができ、大変有意義な訪問だった。



◆【所 感】台湾

～国立故宮博物院を訪れて～

野口 隆志

(株)ノサックス 専務取締役

国立故宮博物院は台北市北部の士林区に所在し、世界でも有数の収蔵量とその文化的価値の高さから、ルーブル美術館、エルミタージュ美術館と並び称される博物館です。常設展示の美術品はおよそ6万点、収蔵品全体ではおよそ68万点であり、その9割は清朝が残していたものとのことでした。

この博物院の歴史は蒋介石国民党政府の紫禁城（故宮）一般開放から始まりました。国民党による以後の美術品収集は、当時は帝国主義列強の侵略から、戦後においては中国共産党による文化大革命という組織的な文化の破壊から中華民族の貴重な歴史的遺産を保護するという役割を担い、今はその圧倒的な所蔵数と多数の重要な文化財および美術品が数千年に渡り中国大陸に花開いた数々の文明の栄華と美を余すところなく伝えていきます。



展示中、最も観光客の目を引いていたのは白菜のような玉の加工品である翠玉白菜（清時代、19世紀、重要文化財）、そして豚の角煮のような肉形石（清時代、17世紀、重要文化財）でした。どちらも極めて精巧な美術品でしたが、なんでも食べ物にしてしまう中華民族の旺盛な食欲を感じさせ、どこか微笑ましいユニークさも兼ね備えていました。一方で圧巻だったのは殷や西周という途方もない古代の青銅が、まるで昨日作ったかのような美しさで展示されていることでした。また唐、北宋、明、遼からの青磁や白磁、玉や書、仏像なども数多く展示されており、中国大陸に花開いた偉大

な文化の神髄を垣間見ることができました。

故宮博物院の歴史は中華民国（国民党）の辿った苦難の歴史とも言えます。国民党は中華民国建国13年目の1925年、清朝皇帝溥儀を紫禁城（故宮）から追放し、10月10日には一般に公開しました。これが「故宮博物院」の始まりです。歴代皇室と宮廷が代々密かに所蔵していた大量の貴重な美術品や文化財の一般公開はおそらく、本当の意味で人民に革命の実感を与えたことと思います。また同時に、人々が自由に宮廷に出入りし中華文化の至宝を鑑賞できるようになったことで、当時列強に蹂躪されていた中国にあって、人民をして中華民族の文化への誇りと自信、アイデンティティを取り戻す大きな役割を果たしたであろうことは想像に難くありません。1925年当時の所蔵品点検レポートによると所蔵品総数は117万件を超えており、博物院は古物館、図書館、文献館を設けて各種文物の整理をする一方で宮殿内に展示室を開設して多様な陳列を行っていたとのことですが、日中戦争の拡大に伴い収蔵品は上海、南京重慶など各地に疎開を続け、終戦後一旦は南京に集められたものの国共内戦とともに1948年に台湾へ逃れてきました。それがこの博物院の基となりました。



建物を出てふと振り返ると、白壁と緑の屋根、そしてその上には朱色の台湾国旗が青い空にまばゆく映えていました。この旗に守られた膨大な美術品が戦火の中広大な中国大陸をほぼ散逸せず辿った長い旅路と、それぞれの美術品を守ってきた名もなき英雄たちの存在に思いを馳せると、このアジア文化の至宝ともいえる収蔵品が、多くの奇跡によってここに存在するのかもしれないと、静かな感動を覚えました。

～国父祈念館～

森藤 雅彦

住友商事(株) 中国支社長

国立国父紀念公園は日本でも有名な孫文先生は（号は中山、字は逸仙）を記念して建築されました。台湾では国父、中華人民共和国では革命の父と呼ばれています。台湾を知り、この記念公園の意味を知るために、孫文先生について少し述べます。

孫文先生は、中華民国臨時政府が成立すると臨時大総統に就任しました。しかし、その地位を清朝の実力者であった袁世凱に譲ることになったため、再び革命を起こしますが敗れて日本に亡命します。孫文先生は、1913年から1916年までの約3年間、日本に亡命し、1914年に中国国民党の前身である中華革命党を東京で組織しました。そしてその翌年の10月25日宋慶齡と東京で結婚したと言われます



中国へ帰国した後の孫文先生は、第一次国共合作を成立させ、中国国民党を改組、革命軍を組織し北京政府を打倒するための準備を進めます。1924年11月、北京で政変が起こると孫文は北上を決断し、その途上神戸に立ち寄り、11月28日に「大アジア主義」に関する有名な講演を行っています。講演の内容は次のようであったとのこと。孫文は、ヨーロッパの侵略によって衰退を続けたアジアが、日本による不平等条約の撤廃をきっかけに復興へと向かったこと、アジアの諸民族は日露戦争の日本の勝利によって勇気づけられ、独立運動を起こしたことを指摘します。その上で欧米の文化を物質的且つ武力的とし、東洋の文化を精神的道徳的であるとの対比を行い、東洋民族が一致団結して欧米と対抗することを呼びかけた。孫文先生は無くなる前にこういい残されています。「国民革命に力を致すことおよそ40年、その目的は中国の自由平等を求めるにあった。40年の経験を積み、その目的に到達するためには、必ず民衆を喚起し、世界の中国を平等に扱ってくれる民族と連合し共同で奮闘しなければならないことを深く知った。現在、革命は未だ成功していない。およそ我が同志は私が著した『建国方略』、『建国大綱』、『三民主義』と『第一次全国代表大会宣言』に依って、引き続き努力し、成し遂げなければならない。」日本とのかかわりも深い孫文先生をいつまでの尊敬する台湾の方々と日本人はもっと近く、もっと深い関係を持てると思います。

国父紀念公園は、本堂のまわりが中山公園として整備されています。南西側には翠湖と呼ばれる池があり、台北市の真ん中にありながら自然を感じられる場所です。その広い公園で散歩したり、衛兵の交代式を見られたり、朝には太極拳で健康維持をされようとする人々とたくさん出会いました。孫文先生の坐像を守る衛兵の交代式は、毎日9:00から17:00まで1時間ごとに行われるとのこと。私たちは朝一番の交代式を見学しました。



～台湾の食～

奥原 祥司

コトブキ技研工業㈱ 代表取締役社長

台湾の料理は、中国南部の福建料理などの食文化が持ち込まれたのがベースとされている。また、朝昼晩を全て外食や中食（弁当等の出来合いの物を持ち帰って自宅で食す）で済ませることも珍しくなく、台湾の賃貸住宅にはキッチンが着いていない物件もあるとか。

台湾の朝食は朝6時頃から道の両側で開いている朝ご飯専門のお店での食事がメイン。

種類はたくさんあるが、朝食でよく食べられる伝統的な料理は「中華クレープ」や「葱入り餅」、「台湾風おにぎり」で、中華クレープは好きな具材（お肉・ハム・ツナなど）を小麦を溶いた皮に入れて春巻きのように巻いた物。葱入り餅は皮に葱が混ぜ込まれ、好きな具材（やはりお肉やハム・ツナなど）を入れて半分に折った物。どちらも卵を入れるのが定番で似ているものの、包み方で違いが出る。また「台湾風おにぎり」はもち米に様々な具材と「油条（ヨウティヤオ）」と呼ばれる揚げパンなどを巻いて油で揚げた物で、こちらも人気がある。



昼食はお弁当か学食や社員食堂などとなるが、社員食堂の無い会社員はお弁当のほか「熱炒（ラーチャオ）」と呼ばれる台湾式居酒屋で魯肉飯（ルーローハン）や牛肉面（ニューローミェン）、小籠包等の単品料理で済ませることが多い。

そして夕食は家族揃って、または会社仲間や友人と一緒に外食となり、レストランや台湾式居酒屋の「熱炒」で、主食（米・麵）とスープと3品程度のおかずで構成され、おかずには炒め物や揚げ物が出ることが多い。また、アルコールも食事と一緒に摂取し、2次会にはあまり行かない。



台湾では日本の食材が手に入りやすいことから日本食も広まっており、最近では日系の外食企業の進出も進んでおり、日本でもよく見かける定食屋や牛丼屋・カレー屋・回転鮎屋等々のチェーン店も多く見受けられ、我々の滞在中も数種類の

有名チェーン店の店舗も見かけた。

今回我々は団体行動ということもあって朝ご飯のお店や熱炒での単品料理を食べる機会はなかったが、昼食や夕食では台湾料理を味わったり夜市で現地の人達の食事の光景を見たり、更には現地の市場に並んでいる食材を見学することで、現地料理の雰囲気を感じることが出来た。

～台湾雑感～

古川 浩延

ゲイソー・ロジスティクス(株) 代表取締役社長

まだまだ国内でも残暑厳しき9月半ば、東京羽田より台湾の首都である台北市内松山空港に到着。実はちょうど10年前にも同友会の視察で訪問して以来で、個人的にはアジアでも最も居心地がよく、日本国内を歩いているのときほど違和感なく過ごせる点において好きな「国」の一つである。

さて、今回報告のテーマは「人々の生活、文化、街並みについて」ということであるが、残念ながら滞在が発着日入れてわずか2泊しかない上、バスでの移動時間も長く、充実した地下鉄網を使って探検したり街を「そぞり歩く」機会が早朝・深夜のわずかな時間しかなかった為、地元の人々とのリアルな体験談や感想が薄くなること、ご容赦願いたい。

～台湾北部、台北市を中心に～

台湾最大の人口（約250万）を擁し、急速な発展を続ける台北は台湾の政治、経済、文化の中心地。美しい翠玉白菜をはじめ、70万点に達する歴代文物を収蔵する「故宮博物院」は最大の目玉として、到着後今回最初の視察先となった。また、有名な超高層複合ビル「台北101」（高さ508m）は宿泊先ホテルから至近距離であり、昼夜の威容を堪能させてもらった。一帯に足を運んでみると、日曜の深夜にも関わらず遅くまで若者や家族連れで賑わっていた。



また、産業振興の話題にはなるが、今回個人的に最も関心があったのは、時節柄世界の中心として競争力を如何なく発揮している半導体製造に関わるインフラの実情であり、中心地は新竹県と言う、桃園国際空港に最寄りのエリアに、日本のつくば市を思わせる新興ベッドタウンとして先端技術の集積が着実に実現しており、国策として産業育成を進める台湾の高度な戦略性と力強さについて、視察を通じ改めて実感することとなった。



最後に今回の台湾訪問を通じて感じたことを一つ挙げると、前回の訪問は10年ほど前になるが、20世紀前半の日本による統治時代の名残るか（名作家司馬遼太郎シリーズに詳述の通り）、穏やかな街並みや親日的な人々の様子に良い意味で衝撃を受けたことを鮮明に覚えている。地政学的に厳しい環境がこの先も続くことになるが、これからも何とか平和に、両国間の関係発展が続くことを切に願っている。

～台湾の視察を振り返って～ 視察先を中心に全体を通じて感じたこと

荒谷 悦嗣

(株)荒谷建設コンサルタント 代表取締役

個人的には台湾の訪問は、2020年1月以来、約4年ぶりであった。当時はコロナ禍直前であり、また総統選挙真っ只中であった。その後、その総統選挙で選ばれた蔡英文総統の支持率が新型コロナ対応で急上昇したり、オードリー・タン（唐鳳）デジタル担当大臣の手腕が評価されたりと、コロナ禍の中で台湾国内で大きな動きがあったため、今回の視察を非常に楽しみにしていた。個人的な台湾視察のポイントは大きく3つあった。一つはウクライナ情勢に端を発した台湾情勢の変化を知ること、二つ目はTSMCをはじめとする台湾半導体産業隆盛の過程を知ること、そして三つ目は台湾から見た日本を知ることであった。

一つ目の台湾情勢について、今回の台湾の視察は、奇しくも故宮博物院の孫文像に迎えられて始まり、最終日は国父紀念館の孫文像に見送られた。孫文は台湾では国父とされ、中華人民共和国では近代革命の父とされており、日本との関わりも深い人物である。その後の歴史的な経緯から一国二制度となり中国本土と事実上袂を分かち形になっているが、改めて両者のルーツが同じであることを再認識した。また、視察先の日本台湾交流協会で泉裕泰大使のお話を伺い、前述の蔡英文総統が選出された頃と現在とでは、市民の考え方が変わってきていることにも気付かされた。いずれにせよ、台湾海峡の焦臭さを平和的に払拭する方法はないものかと思いを巡らせるばかりである。

二つ目の台湾半導体産業に関しては、今回の視察でTSMCミュージアムを見学する機会をいただいた。TSMC創始者であるモリス・チャン（張忠謀）氏に以前から興味があったので、氏を知る非常に良い機会となった。チャン氏は米国での長い下積みを経て、56歳にして地元台湾でTSMCを創業し、世界最大のファウンドリにして世界屈指の企業に育て、経営の一線から退いた92歳となった現在でもメディアに出演するなど精力的に活動している。TSMCの他にも鴻海精密工業があり、米NVIDIAと米AMDのCEOも台湾出身であるなど、この分野で台湾は確固たる地位を築いている。こうした企業家や経営者を生み出す台湾の土壤に益々興味を抱いている。

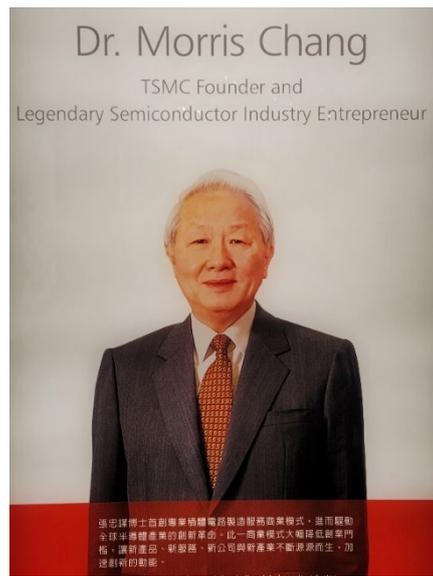
三つ目の台湾から見た日本に関しては、元々、日本に友好的な土地柄であることは知っていたが、今回の視察でも日本ブランドのものを多く目の当たりにした。台北市内はトヨタの「カローラクロス」という車を見かける機会が非常に多かったが、この車種はトヨタ車で初の台湾生産SUVであるとのこと。また、視察で訪れた市場では、日本の果物は特に品質が高いものとして取り扱われ、非常に高価で取引されているのが印象的だった。コロナ禍で海外を訪れる機会がなく、「海外から見た日本」を長らく体感していなかったが、こうして改めて見ると、日本ブランドが海外で活躍していることを誇らしく思う。

今回の視察先から学んだことは以上のようなことだが、日本ではTSMCの熊本への進出が大きなトピックとして扱われており、日台関係は両者にとってますます重要なものになってきている。その一方で、万一の台湾有事があった際には日本への影響は避けられないと予想される。表向きは国交のない「国」とは言え、慎重かつ着実に前向きな日台関係を築いていかなければならないと感じた。

▲国父紀念館の孫文像と衛兵交代式



▲TSMC 創始者モリス・チャン氏



▲市場において日本の果物を示す札

◆【所 感】ベトナム

～広島大学ベトナムセンター交流会～

山根 以久子

(株)サンポール 代表取締役会長

広島大学ベトナムセンターとの交流会は、9月20日の夕方、ホーチミン市内の「コムニェウ レストラン」にて開催されました。

「広島大学ベトナムセンター」は、ベトナムからの留学生の獲得、ベトナムに留学や研修に行く広島大学の学生によるセンターオフィスの活用、日本とベトナムの学術交流、文化交流活動への支援、ベトナムにおける日本語や日本研究の教育・学習促進への支援、広島大学ベトナム校友会の活動拠点等を目的として、2010年11月にベトナム国家大学ホーチミン市校の人文社会科学大学内に設置されています。

ベトナム国家大学ホーチミン市校とは、ベトナムに2つある国家大学の一つ（もう1校はハノイにあります）で、傘下に工科大学、自然科学大学、人文社会科学大学、国際大学、情報工科大学といった複数の大学を持つ総合大学です。広島大学は2010年2月にベトナム国家大学ホーチミン市校と大学間交流協定を締結しました。

今回、交流会に参加してくださったのは、ベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学日本学学部の学部長 フィン トロン ヒエン博士、基礎日本語学科長 ディン ティ キム トア先生、チャン ティー トウイ チャン先生、そして日本学学部の学生さん5人です。

みなさん、流暢な日本語で話をされていました。日本のアニメはやはり人気で、「ドラえもん」「名探偵コナン」など見て育ったそうです。ただ女の子たちが口をそろえて大好きと言った「カードキャスターさくら」というアニメは私の知らないものでした。

日本学学部の中には、基礎日本語学科、応用日本語学科、歴史文化学科、経済政治学科があります。単に日本語の習得をするだけではなく、日本の歴史、地理、文化、政治経済等、日本を丸ごと学ぶ学部であるということをみなさんが強調されていたことが印象的でした。しかし日本語が理解できないと何も始まらないので、1年2年では日本語の基礎を、3年4年になると応用をみっちり勉強するそうです。

毎年3月には、広島大学ベトナムセンター、公益財団法人小丸交通財団及びベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学の共同主催による「日本語作文スピーチコンテスト」が開催されるので、みなさん奮って参加するとのことでした。今年は「交通」がテーマだったそうです。

また5月には、日本学学部学生による文化祭「皐月祭り」が行われます。日本留学・日本文化等の展示・紹介ブースが設置され、メインステージにおいては日本の歌や踊りなど多彩なパフォーマンスを披露する「紅白歌合戦」もあるとのこと。広島大学もブースを設けて、主に大学紹介や留学の説明をおこないますが、日本文化紹介として折り紙の実演などすることもあるそうです。

ベトナムのみなさんにもっと日本を知ってもらって、ますます好きになっていただきたいですね。



～ベンタイン市場～

長沢 伸彦

(株)たびまちゲート広島 取締役会長

ベンタイン市場は1900年代初頭にできたフランス統治時代の建物といわれており、約10,000㎡の敷地内に約2,000もの店舗が集まるホーチミン市内最大級の市場です。

ホーチミン市内の中心地にあることから旅行者が訪れやすい市場となり、市民の台所としての役割よりも土産物屋の数が多いのが特徴となっています。市場内は食材、衣類、靴、日用品、アクセサリーなどカテゴリ別に細かくエリア分けされており、カメラを向けると、どこのお店からも日本語や英語で活発に話しかけてきて、東南アジア独特の商魂のたくましさを感じました。



新型コロナウイルス感染症による海外からの入国規制を受け、一時は大半の店がシャッターを下ろして閑散としていた時期もあったようですが、現在は、夕方になると巨大な屋台が埋め尽くす夜市が復活するなどパンデミック前と変わらぬ活気を取り戻しているそうです。



また、現在ベンタイン市場周辺は2024年開業を目指した地下鉄1号線の開発が行われており、大規模なショッピングモール建設計画もあって、数年後にはベンタイン市場周辺の景色も変わっていくと考えられますが、ベンタイン市場はホーチミンを象徴する場所の一つとして今後も残っていくものと思います。

最後に、旅行社として市場を見学するときの注意点をいくつか挙げておきたいと思います。まず第一に、貴重品は持っていない。市場内は大変混雑しており、万が一スリやひったくりにあっても被害は最小限にしたい。二番目は、市場内では飲食しない。食材や氷、飲料、カットフルーツに使用する包丁などは衛生的でない場合が多く、いったん腹痛を起こすとなかなか回復しない。三番目は、市場では買い物をしていない。特に外国人相手だと相場の3倍～5倍の値段を提示してくるので、市場は見学するところと割り切る。ということで、皆さんこれからも有意義な海外旅行を是非お楽しみください。

～広島銀行ハノイ駐在員事務所～

井上 広隆
日本銀行 広島支店長

広島銀行ハノイ駐在員事務所の中山紘所長（写真）から、ベトナムの概要や最近の話題についてレクチャーがあった。特に印象に残った点は以下の通りである。

1. ベトナムの概要

ベトナムの面積は33万平方メートル。人口は最近1億人を突破したところであり、中位年齢が32歳と若いことが特徴的である。

在留邦人数は約2万人。商工会議所に入っている日系企業は約2千社で、ベトナムの南北で概ね半々のイメージ。商工会議所に入っていない企業も含めると、2,500～3,000社程度がベトナムに進出しているとみられる。

商工会議所では、日常的な企業間の情報交換のほか、新規制ができた際には日系企業で足並みを揃えて対応するための調整などを行っている。なお、ハノイには広島県関連企業の集まりがある。会員総数は100名程度で、20～30人規模の懇親会を随時開いている。

金融機関でハノイに進出している先をみると、三菱UFJ、みずほ、三井住友の3行が支店を設置しているほか、広島、常陽、十六、大垣共立の地銀4行が駐在員事務所などを置いている。このほか、商工中金も近々事務所を開設すると聞いている。

ベトナムの南北で日系企業の状況を比較すると、北部には主に製造業が進出している。政治の中心であるハノイに近い北部の方が工場建設などに当たっての許認可を取りやすいとの見方が背景になっている。また、南部の方が土地の利用料が高く、工業団地の土地自体も不足気味であることも影響している。



2. 政治面の動き

昨年来、汚職撲滅の名目でグエン・スアン・フック国家主席を含む政府要人の失脚が相次ぐなど、政治面では混乱がみられている。こうした混乱は、建設工事の許可が下りないとか、許認可のライセンスが取れないといった点で日系企業にも悪影響を与えている。

3. 経済面の動き

コロナ前のベトナム経済は年率6～8%の高成長が続いてきたが、今年は4～6%程度の低成長にとどまる見込み。実感としては、経済の状況は成長率の数字よりも悪い。半年前に底を付けた後、中央銀行の金融緩和もあり方向としては上向いているが、政府が出す情報や統計の正確性に疑問を呈する向きもあり、国民には不満が溜まっている。実際、コロナ前は年間30万台を数えた自動車販売は大きく落ち込んでいるし、街では閉じたままの店も多い。日系企業のローカル社員の消費行動をみても、バイクやスマホを買い替えないなど、冴えないものとなっている。ちな

みに、当地では中秋の名月を祝うのに月餅を食べる習慣があるが、例年は「1個買えば1個無料 (buy one, get one free)」であったが、今年は「1個買えば4個無料 (buy one, get four free)」といった宣伝文句もみられる。

この間、都市におけるインフラ整備も難航している。例えば、ハノイにおける地下鉄工事は7回も完成が延期されており、当初の予定から17年も遅れている。

4. 外交面の動き

今年は日越外交関係樹立50周年。偶然であるが、本日、秋篠宮ご夫妻が来越され、政府としての公式行事が開催されている。

こうした中、先日、米国バイデン大統領が来越し、米国とベトナムの外交関係を最上位に引き上げるとの発表を行った。ベトナムを外交上の最上位国として位置付けているのは、米国、中国、ロシア、インド、韓国の5か国で、残念ながら日本はその中に入っていない。

駐在員の数で見ると、韓国企業は日本企業の10倍に達しており、ハノイでは韓国人街の方が日本人街よりも規模が大きい。街で出会うビジネスパーソンも韓国人や台湾人が目立っているのが現実。日本としては、外交面でもベトナムとの繋がりを一段と深めていくことが期待される。

以上のような中山所長からの話を離れて最後に余談をひとつ。食事の際にルオウ・ネップカイという地酒（写真）が供された。これは祭事に用意されるもち米100%のライスリキュールとのことである。アルコール度数は29度と、今回の視察を通じて最も強いお酒であったが、まるやかな舌触りを参加者一同は大いに堪能した。



～ベトナムの食～

田村 満則

ヒロコンフーズ(株) 代表取締役社長

ベトナム料理は、やさしい味付けで、野菜をたくさん使ったヘルシーな料理である。ベトナムは中国王朝の支配を長く受け、フランスの植民地となっていたこともあるため、ベトナム料理は中国料理とフランス料理の影響を強く受けている。米やもちを食べたり、おはしや茶わんを使い、お茶を飲んだり、フィッシュソースという発酵調味料を使う文化は、中国の影響を受けたものである。また、フランスの影響でベトナムはどの地域に行ってもフランスパンを食べ、コーヒーを飲む習慣がある。フランスパンにハムや野菜を挟んだ‘バインミー’のサンドイッチはベトナム料理の定番である。特にカフェ文化も浸透しコーヒーを飲む習慣も生まれ、現在ではブラジルに次いで世界第2位のコーヒー輸出国でもある。



材料としては新鮮なハーブ、野菜、ライスヌードル、シーフード、肉（特に豚肉や鶏肉）、調味料ではフィッシュソース（魚から作られる発酵調味料 風味をよくする。）、タマリンド（マメ科のフルーツで酸味が効いたソースで魚料理やシーフードに使用する。）、チリ（辛味を加えます）、シュガーケイン（甘味を加えるジュースです）などを中心に使用する。特にフィッシュソースは小魚と塩を発酵させた魚醬で、うま味の元であるグルタミン酸を豊富に含む為、料理に使うと素材のうま味を引き出し、料理に深みやコクを引き出してくれる。日本では、出しとして使用する昆布にもグルタミン酸が豊富に含まれており、出しとして料理への使用目的は同様だと思われる。また、バジルやコリアンダーなどの香草をよく使用するため、爽やかで食欲をそそる料理になる。調理法は炒める、煮る、蒸す、生食など様々な調理法が使われており、生の材料が主要な要素となる料理も数多くある。ベトナム料理はフォーをイメージするかもしれないが、実は日本と同様にお米が主食となる。しかし、お米の種類は日本と少し違い‘インディカ米’と呼ばれる細長いお米が主流で、粘りが少なくパラパラしていて香ばしい香りが特徴である。食べ方は炊いたお米の上にスープをかけたり、おかずを乗せて食べる。またお米から作った麺料理のフォーやライスペーパー等もあり食べ方のバリエーションも多くある。ベトナム料理のおいしさの秘密は‘五味・五彩・二香’にあるといわれている。‘五味’は塩気、酸味、から味、あま味、コク。‘五彩’は黒、赤、青（緑）、白、黄。‘二香’はよい香り、香ばしい。これらを一皿の中にできるだけ多く入れることがベトナム料理にとって見た目も美しく、おいしい料理を作る秘訣だといわれている。ベトナム料理の出しに関しては、フォーや他のスープベースの料理では、長時間煮込んだ骨や肉から取った出しが使われる。この出しは、スープのベースとして、深い風味とコクを提供する。フォーの場合は、牛骨や鶏骨を煮込んだり、香辛料を加えて風味をつけたりする。また、他の料理においても、肉や魚の出しを使用することがあり、出しは料理の味わいを豊かにし、ベトナム料理の特徴的な風味を形成する重要な要素である。日本の出しでは昆布（グルタミン酸）、干し椎茸（グアニル酸）、いりこ（イノシン酸 魚の風味が強い）、鰹節（イノシン酸）が主な出しといわれているが、ベトナム料理と日本料理の出しの違いは、ベトナム料理は‘五味’をバランス良く組み合わせた味わいが特徴で、フィッシュソース、タマリンド、チリ、シュガーケインなどの調味料の組み合わせであり、日本料理は、醤油、みりん、酢、わさ

び、味噌を出し（グルタミン酸、グアニル酸、イノシン酸）、など独自の調味料を用いられて、繊細でバランスの取れた味わいが特徴であるためである。

ベトナム料理は地域によって異なる食文化となっている。ベトナムは南北に長く、地方によって気候が大きく違うので北部、中部、南部それぞれの食文化がある。ベトナムの国民食といえばフォーであるが、フォーは首都ハノイがある北部生まれである。北部は中国に隣接しているため、中国料理の営業を強く受けている。塩や醤油がベースの味付けでさっぱりしている。また、フェなどの世界遺産が集まる中部は、とうがらしなどのスパイスを使った辛い料理が多くあります。酸っぱくてピリッと辛い牛肉めん‘ブンボーフェ’はフェの伝統料理である。ホーチンのある南部は、一年中暖かくココナッツミルクを使った甘めの味付けが特徴で、ベトナム風生春巻き‘ゴイ・クオン’‘やベトナム風お好み焼き’バインセオ‘が有名である。ベトナムの春巻きは、生春巻きをイメージする人が多いが、揚げ春巻きも有名である。南部の暑いホーチンミンでは生春巻き‘ゴイ・クオン’‘がどこのお店にも置いてあるが、比較的寒い北部では揚げた春巻き’ネム‘が主流である。また、ベトナムはカシューナッツ大国で、ベトナムの南東部が産地として有名で、たくさんのカシューの木をみることができる。お土産としても人気で、ベトナムの市場ではたくさんのナッツが大きな袋に入って並んでいて、量り売りをしている。また、多くの国にも輸出をしている。ベトナムは朝が早く、学校が7時位から、会社は8時位から始まる。そのため、朝ごはんは通学、通勤途中の屋台でフォーを食べる人が多く、小さ目なフランスパンにラバーペーストや野菜をはさんだ’バインミー’も一般的である。ランチは’コムブンサン’‘と呼ばれる大衆食堂で食べるのが人気で、お店には大きなお皿におかずがもられていて、食べたいおかずを指で指すと店員さんがテーブルに持ってきてくれる。

ベトナムでは、家庭でも外食でも食事には、必ず汁物（スープ）がつく。ご飯をスープに、あるいはスープにご飯を入れて、お茶漬けのようにして食べる習慣があるので、汁物がないとご飯が食べられないベトナム人も多くいる。また、日本ではラーメンやおそばスープを飲む時に、どんぶりに口をつけて飲むことも多いが、ベトナムではこれはマナー違反である。必ずスプーンを使って飲む。どんぶりは持ち上げずに置いたまま食べる。食後の楽しみはココナッツのように甘い香りがするコーヒーにコンデンスミルクを入れて飲む。デザートとして、スイーツではチューです。日本でいうぜんざいやあんみつのようなもので、甘くにた豆類やいも類、寒天、フルーツなどを組み合わせて、ココナッツミルクをかえた冷たくて甘い見た目もカラフルで可愛い伝統的なデザートである。



ベトナムでは、共働き家庭が多く外食することが多いが、皆が集まって食事する時間を大切にしている。食べることを楽しむ、食べることを通して家族とのつながりを大切にするのもベトナムの食文化の一つである。

ベトナム料理、調理の習慣は、食材の活用と季節や気候への適応であるが、地域毎の食べ物の構成や特徴はやはり、季節や気候に大きく影響をうけている。この要素がベトナム料理の特色である食文化を形成している。また、今後は経済、政治、社会状況、文化交流、科学技術の発展および人々への認識の変化が、食材の使用と調理、食生活、食習慣、飲食の場での振る舞い、飲食への考えかたにも変化をもたらすが、伝統であるベトナム料理の文化は今後も価値を失われることはないと期待する。

～ベトナム雑感～

田村 興造

広島ガス(株) 代表取締役会長

1. はじめに

ベトナムといえば、長い歴史の中では、一時中華王朝による占領などいろいろな国家体制の変遷はあったが、最終的には外国からの侵略に屈せず、ベトナム民族としての国家づくりを全うしてきた国だというイメージが私にとって強くある。いわく、フランスとのコーチシナ戦争、アメリカとのベトナム戦争しかり。北部で国境を接する中華の国々にも、現代の大国フランス、アメリカにも、最終的には戦争で負けたことはない…その意味で、賢い民族だ。

2. 旅行会社現地係員の話から

- ① ベトナムの人は、暑い時に歩くのが嫌いで、徒歩での1kmはとても長く思えるようだ。したがって、乗り物は基本的にバイクを利用する。自転車はというと、これは漕ぐと暑くなるので乗りたがらない。ホーチミン市の「人口は900万人で、バイクの数は800万台」というのがその証左だ。
- ② 土地は国有だが、使用权は市民が取得でき、その使用期限はない。私有ではないから相続税もない。借地費用は随分高いようだが、日本のように、相続で四苦八苦していることを思えば、むしろ楽かもしれないとも思える。
- ③ ホーチミン市の巨大なベントイン市場には、ありとあらゆる物品を扱う400件ほどの店が立ち並び、お客はほとんどが観光客だ。お土産の購入そのものより、値引き交渉の醍醐味が楽しみ方の一つだそうだ。コロナのときは、屋内で営業ができないことと、客足が遠のいて大変だったようで、その時は、夕方6時から深夜12時までの間、ナイトマーケットを屋外の路上で開いてしのいだという。新型コロナ感染拡大時の苦労は、世界共通と言えそうだ。

3. 街なかで気付いたこと

- ① 東南アジアの果物の王様は、言わずと知れたドリアンだ。強烈な臭いの成分は、揮発性硫黄化合物・VSCということだが、一度食べたら病みつきになる人が多いという。私は、インドネシアやマレーシアで一寸ご相伴にあずかったことがあるが、どちらかというと言いたい側。おそらくその臭いからだろう、この両国では屋内のデパートやスーパーマーケットなどでは販売されていない。ところが、なんとホーチミン市のど真ん中の市場やスーパーマーケットの建屋内で商品のドリアンを発見した、あの懐かしい臭いを伴って…。インドネシア、マレーシアにはない「おおらかさ」を感じたというの大げさだろうか。
- ② ホーチミン市の歩道上で、電線の工事現場に出くわした。よく見ると、市内は電柱がなく、全て地下埋設されているようだ。小さな共同溝みたいな溝の中に電線のケーブルを挿入配線していて、この点、我が国は遅れをとっているかもしれない。
- ③ 欧米でも東南アジアでも、海外出張のホテル滞在中、特に夜中には、必ずと言っていいほど救急車やパトカーのサイレンの音が耳に入ってくる。ところが、ホーチミン市もハノイ市も、

サイレンの音が聞こえてこないのだ。いろいろな情報があるが、少なくとも私の周りでは治安の良さが感じられた。

4. むすびに

凡そ 20 年前に、私は液化天然ガス・LNG の売買契約で、マレーシア・ペトロナスの LNG 部門の人たちと頻繁に交渉を重ねていた。その一人に LNG 輸送部門長のシャヒブ船長 (Capt. Shahib) がいた。ある時、「田村、たまにはマレーシアと日本の中間地点で交渉をやろうじゃないか」と言って、ホーチミン市を交渉場所として提案してきた。二日間だけの交渉で短い滞在であったが、料理にも違和感はなく、フレンドリーな街だなと印象を持った。今回もその印象は薄らいではない。

実は、ホーチミンはシャヒブ船長のお気に入りの街で、その時、ちゃっかり彼は奥さんまで連れてきて、安い物価の下でショッピングをエンジョイしていた。さらに、今年の春先に彼から久方ぶりのメールが入ってきて、またまた奥さんや家族とホーチミンでバカンスをエンジョイしているという。

物価が安い、程々治安が良い、人々がフレンドリーといったところが、万国共通の評価なのかと、改めて今回の旅路を振り返り思うところがある。



【バイク天国 ホーチミン】

～ベトナムの視察を振り返って～

堂本 高義
堂本食品(株) 代表取締役社長

数年ぶりにベトナムを訪問した。

《訪問先の印象、感想》

*イグアスコーヒー

丸紅さんの子会社
人の少ない装置産業
4交代で24時間操業
投資金額が大きいのびびっくり

*トヨタヒロシマタンカンHT社

数年前に比べ敷地建物が4倍に！
藤井社長さんのベトナム進出理由にびっくり！
社員採用において、2か月目、1年目、2年目、
3年目と節目があつてその時には、会社、社員
とも解雇退職ができるとは、素晴らしい！

*HALベトナム社

前回訪問時は1工場であつたが、
3工場になっていてびっくり！
2002年から21年間立派に
経営されている。
社長さんもベトナム人で日本人は
4人とのこと。日本の工場へも研修
で行かれている。
すばらしいビジネスモデルだ！

*FTPソフトウェア社

FPTがFood Process Technologyの略
日本のSoft Bankと同じような成長
スタッフさん達が生き生きと働いている。
発展する企業は、素晴らしい！

《その他感じたこと》

バイクの数多さ、4人乗り、アクロバティックな運転は、あいかわらず。
いくら見ても飽きなかった。
この逞しさが素晴らしい！

《笑ったこと》

汚職「ネット記事から」

「2022年には共産党員539人が汚職で処分を受けました。最高指導者のグエン・フー・チョン共産党書記長は、一連の汚職事件の摘発を主導し、国内の汚職・不正撲滅を進めることによって権力基盤を強化しています。汚職に対する国民の不満は根強く、汚職・不正撲滅強化に力を注ぐチョン書記長への国民の支持が広がっています。

上記にあるように賄賂や汚職にたいする対応が厳しくなっている。

最近では、いろいろな申請書類の許可を役人がなかなか認めないようだ。
なぜなら、認可してしまうと、汚職の疑いをかけられる。そして過去の事例まで遡って調べられてしまうからだそうだ。たたけばほこりがでる。



《技能実習生》

ハノイのスーパーを見学し、外で待っていると日本語で話しかけられた。そちらを見ると若い青年がニコっとほほえみかけた。

「私は研修制度で岡山に行き3年働いた。そしてこの店をもつことができた」と誇らしそうに述べた。いろいろ問題のある制度だが、成功事例を発見して大変うれしく思った。こういう人達が増えればいいなと思う。



《お気に入り》

ハノイのホテルのコーヒーカップ

とても持ちやすい取っ手で気に入った。

欲しかった！



～ お わ り に ～

広島経済同友会
台湾・ベトナム経済視察団
副団長 山本 慶一朗
(株)中国新聞社 社長兼常務取締役

2020年から猛威をふるっていたコロナ騒動から人々がようやく落ち着きを取り戻し、海外経済視察をこのたび復活させることができた。思い起こせば4年もの間、計画は立てるものの実現に至らないままで終わっており、無事に視察を終えられてほっと胸をなでおろしている。委員会内部の正副委員長の議論では、感染者の少ない国・地域を選び出すところからスタートし、煩雑な移動や複雑な入国手続きを避けるために複数国の移動を減らすなど、様々なシナリオを想定してきた。当初はイスラエルやトルコが候補地に取りざたされ、この1, 2年は中国の都市部に行き先を絞りつつ機会を伺っていたが、その都度緊急事態宣言や渡航自粛に振り回され、計画を白紙に戻してきた。「いっそインバウンドでにぎわう地方集落の視察でもしよう」と真剣に話し合っていた時期もあったことを考えれば、喜びもひとしおである。

第一の目的地が台湾に決まったのは、三山秀昭会員(広島テレビ放送顧問)の発案によるところが大きい。コロナ禍の終わりが見えてきた2023年春に広島商工会議所ビルの2F会議室で行われた会合では、いつものように視察先を巡る様々な議論が交わされていた。そのとき三山会員から「4年ぶりとなる視察ではどこに行くかより、確実に再開させて視察を成功裏に終わらせることに主眼を置くべきだ。多くの参加者を募って盛り上げるためにも、広島空港から復活したばかりの直行便で台湾に行くのはどうだろうか」との意見が出され、出席者の多くから賛同を集めた。第一の視察国が台湾・台北に決まったことから、第二の視察国には台湾からのアクセスが良く、ほどよく地場企業が進出して視察候補先にも困らなそうなベトナムに決まるまでは時間はかからなかった。

最初に訪れた台湾では東アジアの遠洋と近海の中継地として栄えている台北港のコンテナターミナルを訪れた。デジタル化や高度化が大きく進んでいる様子を目の当たりにし、港町を多く抱える広島県民として大きな刺激を受けた。日台交流協会の泉裕泰大使から、緊迫化の進む台中情勢と台湾総統選の見立てについてのレクチャーを得られたことも得難い経験だったと思う。

「この国は社会主義国ではなくアメリカだ。良い仕事をした人は良い給料を求めてくる」。ホーチミン市ビンタイン区にそびえたつベトナム最高層建築のランドマーク 81。そのビルの真横に進出拠点を構える広島トヨタ自動車の藤井一裕社長は、現地で力を込めてそう話してくれた。ベトナム市場ではトヨタの系列企業がすでに進出していたが、広島トヨタ自動車は2005年に販売ディーラーとして進出。仕事に対する従業員のモチベーションは高く、販売実績を積み上げて今では会社の収益のひとつの柱に育ったという。トップがリーダーシップを発揮し、果敢にチャレンジすることの大切さを学ばせて頂いた。

ベトナムでもう一つ印象深かったのは、ハノイでFPTソフトウェア社を訪れたときのことだ。いまではグループで4万人超の従業員を抱える同社だが、日本企業のオフショア開発の下請けとしてエンジニアは寝る間も惜しんで働いてきたといい、正面玄関にはそのことを誇るかのような疲れ果てたエンジニアの大きな彫像が飾られていたことに衝撃を受けた。働き方改革はもちろん大事だ。しかしベトナムで急成長する企業の社員は、日本の高度成長期のサラリーマン

のようにがむしゃらに働いている。日本人は勤勉を自任しているが、果たして今でもそう言えるだろうか。そんなことを考えさせられる訪問だった。

最後になるが、限られたスケジュールに多くを詰めすぎてしまったことをお詫びしたい。早朝からバスで遠方へ出向き、ホテルに戻るのは夜遅くなってからという日も少なくなかった。結果として武田代表幹事をはじめ、多くの団員に身体的な負担をかけてしまったことは大変申し訳なく思っている。次年度は余裕を持たせた旅程の作成を進めたい。そしてこのたびご協力いただいた企業各社や現地子会社の皆様にあらためて感謝を申し上げます。

ありがとうございました。